

第9回「泉大津市オリアム随筆賞」

【佳作】

着ることのなかったセーター

山田幸夫・大阪府阪南市

三十年前、父が亡くなってから母は気落ちしたのだろう、持病が悪化し、入院して間もなく父の後を追うように逝ってしまった。

母が亡くなる数日前のことだった。

私は、母の部屋で編み機と斑模様のセーターを見つけた。丁寧に包装された箱の中に防虫用のナフタリンの欠片とともに、そのセーターはあった。

——大正生まれの母は、外へ働きに行くことなく、自宅で機械編みの内職をしていた。私が学校から帰ってくると、「ジャーツ、ジャーツ」機械編みのリズムカルな音がした。その音に合わせるように「お帰りっ！」と言う母の声が重なった。そのまま音は止むことなく、毎日、夕食時分まで続いた。私は編み物をしている母が好きではなかった。

しかし、小学五年生のときだった。父がお酒に酔って遅くに帰ってきた翌日曜日の朝。母は、脈絡もなく突然、私に父のことを話した。昨夜、お酒のために給料をほとんど使ってしまったのだと。その母の言い方は怒っているふうではなく、父をかばう口調だった。このとき、父の飲酒は、戦争にも原因があるのだと聞かされた。多くの戦友を亡くした過酷な戦場での後遺症を癒すお酒だと。そして、機械編みは、家計の足しにするために始めたが、若いころ実家のある泉州の紡績工場で働いたことがあり、それと縁のある仕事をしたかったと言った。

私は、この日を境に、母に協力する気になっていったように思う。

私が中学生のときだった。母は、機械編みの資格検定を受けると言い出した。

「合格すると、仕事をもっと回してもらえて、収入が増えるんよ」

しかし、実技は何とかなるが、筆記は難しいらしい。

「弟妹の子守で尋常小学校もまともに行ってへんよって、難しい漢字は読まれへん」

そう言いながら、鉛筆の芯を舐めていた姿が思い出される。

試験当日の日曜日、私が重い編み機を持ってついて行き、終わるまでの長い時間、控室で待った。合格者の名が呼ばれた時の弾けるような母の笑顔も鮮明に憶えている。女子中学生のようにはいやいだ。

その後、母は益々忙しくなっていた。夜の遅い日もあり、声をかけたことがある。

「お母ちゃん、早よ、寝えや」

その言葉を無視するかのように多忙を極め、当時流行った英文字やキャラクターを編み入れる依頼も増えていった。

「AとかBとか、英語なんかよう解らへん」

私に英文字のデザインを頼んだ。だから、近所で母の編んだものを着ている人はすぐ分
かり、見かけると自慢したい気分になった。

しかし、自分でも予想外のことが起きる。私の高校受験が迫った三年生の年末のことだ
った。母は、一着のセーターを私に見せた。

「お正月が来るし、セーターを編んだんやけど、ユキオ、これ着てみい」

編み物の仕事は、秋口からお正月前が一番忙しいはずだ。そんな母が、私のために編ん
でくれた初めてのセーターだった。しかし、それは見るからに、余りの毛糸を寄せ集め、
継ぎ足して編んだと思われる斑模様になっていた。妙に派手な柄だ。受験勉強で神経が過
敏になっていたのだろうか、私は、それを手に取ることもなく言った。今も憶えている。

「そんな変なセーターなんか要らん！」

母は曇った表情のまま、何も言わずセーターを握り締めていた。後悔の念はすぐに襲っ
たが、後の祭りだった。素直になれなかった。

そのセーターが、二十五年を経て、私の目の前に現れたのである。横に居た妻が言う。

「誰のセーターなん？ いろんな毛糸が折り重なって素敵なお柄やん。新品のようやし、わ
たしが着てもええかな」

すでに私には小さくなっていたセーターを、妻は胸にあてた。胸の位置に「Y」の文字
が編み込まれていた。中学生のあの時には気が付かなかったユキオの頭文字「Y」。母は覚
えたばかりの英文字を入れてくれていたのだ。

翌日。妻は、セーターを着た。

「肩が落ちてるし、わたしには大きいかな？ まあ、いっつか、大きめが今の流行りやし」
独り言のように言いながら、私と二人で、入院している母を見舞った。

「そのセーター、どこで見つけたんや？ ……アヤコさんが着てくれてるんやね」
(憶えてたんや…お母ちゃん)

「お母ちゃん、セーター、着んと、ごめんな」

涙声を堪えて、それだけやっと言えた。

「他人さんのもんばかり編んでて、ごめんやったで。男の子やもんな、あんな派手なセ
ーター恥ずかしてわな。着てくれんでも、編むことができただけで満足やったんよ」

目が潤んでくるのを堪えられなかった。